

講義の談話におけるメタ言語表現の機能

寅丸 真澄

【キーワード】 講義の談話 メタ言語表現 話段 中心文 統括

1. 研究目的

本稿では、日本語の講義に不慣れな留学生の講義理解の一助として、講義の談話に出現する「メタ言語表現」の機能について考察する。「メタ言語表現」は、談話を構造化して聞き手の理解を促したり、中心文等の重要な部分に出現して情報内容の重要度を明示する表現である。受講者が「メタ言語表現」に習熟すれば、話題の展開や重要な内容を聞き取れるようになり、講義理解が促進されるものと期待される。

2. 先行研究

2.1. 「メタ言語表現」の定義と分類

杉戸（1989:8）は、「メタ表現」を「言語行動による表現や伝達の行動過程、あるいはその表現伝達の内容を、そのつど基準に照らしてよりよく整えようとする配慮に支えられた」表現であると定義し、「①伝達内容を整えるもの」と「②伝達行為を整えるもの」の2種に大別した。また、西條（1999:47）は、「メタ言語」を「談話において、自分あるいは他者の言ったこと、これから言うことに言及する表現」と定義し、7種の機能に分類した（注1）。

本稿では、先行研究を踏まえ（注2）、以下の2点を加えて考察した。(1)受講者の講義理解を目的とするため、言語行動や内容知識に言及する表現を含めてメタ言語表現とする。(2)談話の「話段」の「統括機能」という概念を用いてメタ言語表現を分類する。また、「メタ言語表現」を「講義の談話において、講義者が自分や受講者の言語行動や内容知識に言及することによって講義の談話を構造化し、内容の重要度を明示して、受講者の講義理解を促進させる言語表現」と定義する。

2.2. メタ言語表現と「話段」「統括」「中心文」

「話段」とは、佐久間（1987）の提唱による談話の直接的な構成要素としての言語単位である。また、「統括機能」とは「複数の文や発話の集合体が大小の話題のまとまりを作り上げる働き」（2003:95）であり、

「中心文」とは「文章・談話論において、文と文章の中間に位置する『文段』の核をなし、同一話題を表す他の連文をまとめる『統括機能』を有する文」（2007:2）であると規定されている。

講義理解には、(1)「談話を構造化して話題の展開を捉える能力」と(2)「流れゆく談話から重要な内容を抽出する能力」が必要である。(1)は話段、(2)は中心文等を認定する能力である。話段や中心文が把握できれば、講義の流れや重要な内容を捉えることができる。そして、話段や中心文等を認定する談話指標の一つがメタ言語表現であると考えられる。

3. 分析方法

本稿の分析対象は、「日本語表現論」の講義、【講義 A】と【講義 B】である。【講義 A】(418 文、約 62 分)は 30 代男性、【講義 B】(473 文、約 51 分)は 30 代女性の講義者によって行われた。本稿では、講義の談話に共通のメタ言語表現の機能と、講義内容や進め方の違いによって生じるメタ言語表現の使い分けを明らかにするため、講義者の性別や講義内容、講義の進め方の異なる 2 つの講義を取り上げる。

まず、【講義 A・B】の文字化資料からメタ言語表現を抽出した。次に、メタ言語表現を話段における中心文の「統括機能」で分類し、メタ言語表現と講義の談話展開の関係を明らかにした。なお、談話展開を分析する際は、佐久間（2007）によって認定された「大話段」の「開始部・展開部・終了部」や、「話段」「小話段」「中心文」の概念を適用した。

4. 講義の談話におけるメタ言語表現の機能

【講義 A・B】における全 292 例のメタ言語表現を話段の統括機能から分類した結果、以下に示す 8 類 14 種の機能に分類された（注 3）。

「1. 話題提示」…大話段や話段の開始部分に位置し、開始する話題を提示する機能。提示する話題に対して前置される場合が多い。機能領域は広く、大きな話題のまとまりを形成することができる。

（例 1）A123：「言い換え」というのを考えてみたいと思います。

「2. サブポイント提示」…話段の開始部分または途中で位置し、根拠、重要点、疑問、例示等を示す機能。「1. 話題提示」より小さな話題を表し、話段や小話段を形成する。提示内容に対して前置される場合と後置される場合がある。サブポイントが複数ある場合は、「一つ目は～」 「二つ目は～」 というように項目列挙される場合がある。「2a. 根拠提示」、「2b. 重点提示」、「2c. 疑問提示」、「2d. 例示」の 4 種に分類される。

「2a. 根拠提示」

（例 2）A331：「ていうか」が不愉快に感じられる理由の二つ目ですけ

れども、～

「2b. 重点提示」

(例 3) ここで押さえてほしいのは、言い換えというのは、理解する人のためにしているんだ、ということです。

「2c. 疑問提示」

(例 4) A108: どういう役割をしているかというと、～

「2d. 例示」

(例 5) A77: 同じような例としては、9番ですね。

「3. 自他発話焦点化」…既に講義者自身や講義者によって言及された他者の発話を再び取り上げる機能。話段や小話段の開始部分に置かれて小さな話題のまとまりを表すことが多い。講義者自身の発話に言及する「3a. 自己発話焦点化」と、他者の発話に言及する「3b. 他者発話焦点化」の2種に分類される。

「3a. 自己発話焦点化」

(例 6) A177: 先程言いましたように、～

「3b. 他者発話焦点化」

(例 7) A42: UさんとSさんの言葉が端的に示しているように、～

「4. 用語の規定」…専門用語を定義したり、用語をわかりやすく説明するために言い換える機能。用語の定義を中心とした講義では、話段等の大きな話題のまとまりを形成する。「4a. 用語の定義」と、「4b. 用語の言い換え」の2種に分類される。

「4a. 用語の定義」

(例 8) A118: 繫辞というのは「A is B」のBに当たるものですが、～

「4b. 用語の言い換え」

(例 9) A207: 上書きというか、上に重ねるようにして、～

「5. 表現の調整」…講義内容をわかりやすく説明するため、表現を整えたり、探したりする機能。話段の途中に置かれることが多く、機能領域は小さい。予めどのような表現を用いるのかを明示する「5a. 表現の補正」と、表現を探す「5b. 表現の検索」の2種に分類される。

「5a. 表現の補正」

(例 10) A197: 非常に大雑把に言ってしまうえば、～

「5b. 表現の検索」

(例 11) B142: 正しくは、なんだっけな。

「6. 話題総括」…「1. 話題提示」や「2. サブポイント提示」によって形成された大小の話題のまとまりを話段の開始または終了部分で統括する機能。統括する話段は大話段から小話段まで多岐にわたる。言及内容に関する講義者の評価が加わる場合がある。

(例 12) A383: 以上、話してきたことをまとめますと、～

「7. 受講者の理解確認」…受講者の理解や知識を確認する機能。話段や小話段において、話題となっている事柄に関する理解や知識に言及するため、機能領域は小さい。話段や小話段の途中に置かれることが多いが、話題を導入する目的で冒頭に置かれる場合もある。

(例 13) B33: 「知ってるよ。」っていう人は、いますか。

「8. 行動提示」…講義者が自身の言語行動について前置きしたり、受講者に対して何らかの言語行動を指示する機能。講義の開始部と終了部、話段の開始部分や終了部分に出現しやすく、機能領域は大きい(注4)。

(例 14) A84: 後で説明することになりますが、～

5. メタ言語表現と談話の展開的構造

5.1. 「大話段」(開始部・展開部・終了部)におけるメタ言語表現

【表1】は、「大話段」(開始部・展開部・終了部)に出現したメタ言語表現の機能別出現数と出現率を示す。

【講義 A】は、開始部では「8. 行動提示」(2.2%)、展開部では「8. 行動提示」(12.9%)、「2d. 例示」(12.2%)、「1. 話題提示」(8.6%)、「6. 話題統括」(8.6%)、終了部では「8. 行動提示」(6.5%)の出現率が高い。また、全体を通して、「8. 行動提示」(21.6%)、「2d. 例示」(12.2%)、「6. 話題統括」(11.5%)、「1. 話題提示」(10.8%)の出現率が高くなっている。

【講義 A】では、講義を構造化して受講者の理解を促す「1. 話題提示」、「2. サブポイント提示」、「8. 行動提示」といったメタ言語表現の出現率が高く、講義内容に言及して話をわかりやすくする「4. 用語の規定」、「5. 表現の調整」や、受講者の理解の程度を確認してから話を進める「7. 受講者の理解確認」が低いといえる。

一方、【講義 B】は、開始部では「5b. 表現の検索」(1.4%)、展開部では「7. 受講者の理解確認」(26.2%)、「4a. 用語の定義」(12.8%)、「8. 行動提示」(10.6%)、「4b. 用語の言い換え」(9.9%)、「1. 話題提示」(7.1%)、終了部では「8. 行動提示」(4.3%)の出現率が高い。また、全体を通して、「7. 受講者の理解確認」(27.7%)、「8. 行動提示」(15.6%)、「4a. 用語の定義」(12.8%)、「4b. 用語の言い換え」(9.9%)、「1. 話題提示」(7.8%)の出現率が高くなっている。【講義 B】は、【講義 A】と比較して、専門用語を説明する「4. 用語の規定」や、受講者の理解を確認する「7. 受講者の理解確認」が使用される傾向が強いといえる。

【講義 A】と【講義 B】は、いずれも開始部と終了部に「8. 行動提示」がある。しかし、講義を構造化し、明示的に話題を展開させることによって受講者の理解を促進させようとする【講義 A】と、専門用語の規定

や受講者の理解の程度に配慮することによって受講者の理解を促進させようとする【講義 B】では、講義に出現するメタ言語表現の機能が異なる。このような違いは、講義で取り上げられる話題や講義の目的、講義の進め方、講義者の個性等の違いにより生じるものと考えられる。そこで、受講者は、講義の特徴を踏まえ、メタ言語表現を一つの談話指標として講義の談話を理解する必要がある。

【表 1】開始部・展開部・終了部におけるメタ言語表現の出現傾向

| 資料 | メタ言語表現 | 出現位置 | 2サブポイント提示 | | | | 3自他発話 焦点化 | | 4用語の規定 | | 5表現の調整 | | 6 話題 総括 | 7 受講者 の理解 確認 | 8 行動 提示 | 合 計 | |
|-------------|--------|-------|---------------|--------------------|------------------------|------------------------|------------------|-----------------------------------|-----------------------------------|---------------------------------|---------------------------------|---------------------------------|---------------|-----------------------|---------------|--------|---------------------------------|
| | | | 1 話題 提示 | 2 a 根拠 提示 | 2 b 重 点 提示 | 2 c 疑 問 提示 | 2 d 例 示 | 3 a 自 己 発 話 焦点化 | 3 b 他 者 発 話 焦点化 | 4 a 用 語 の 定 義 | 4 b 用 語 の 換 え | 5 a 表 現 の 補 正 | | | | | 5 b 表 現 の 検 索 |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 講義A | 開始 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 1 | 2 | 0 | 1 | 0 | 1 | 1 | 3 | 11 | |
| | 展開 | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 0.7% | 0.0% | 0.7% | 0.7% | 1.4% | 0.0% | 0.7% | 0.0% | 0.7% | 0.7% | 2.2% | 7.9% | |
| | | 12 | 10 | 5 | 7 | 17 | 4 | 2 | 4 | 7 | 8 | 2 | 12 | 0 | 18 | 108 | |
| | 終了 | 8.6% | 7.2% | 3.6% | 5.0% | 12.2% | 2.9% | 1.4% | 2.9% | 5.0% | 5.8% | 1.4% | 8.6% | 0.0% | 12.9% | 77.7% | |
| | | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 2 | 1 | 0 | 3 | 0 | 9 | 20 | |
| 計 | 2.2% | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 1.4% | 0.0% | 0.0% | 1.4% | 0.7% | 0.0% | 2.2% | 0.0% | 6.5% | 14.4% | | |
| 講義B | 開始 | 15 | 10 | 5 | 8 | 17 | 7 | 3 | 6 | 9 | 10 | 2 | 16 | 1 | 30 | 139 | |
| | 展開 | 10.8% | 7.2% | 3.6% | 5.8% | 12.2% | 5.0% | 2.2% | 4.3% | 6.5% | 7.2% | 1.4% | 11.5% | 0.7% | 21.6% | 100.0% | |
| | | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 2 | 0 | 1 | 6 | |
| | 終了 | 0.7% | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 0.7% | 1.4% | 0.0% | 0.7% | 0.7% | 4.3% | | |
| | | 10 | 1 | 0 | 1 | 0 | 6 | 0 | 18 | 14 | 9 | 6 | 8 | 37 | 15 | 125 | |
| 計 | 7.1% | 0.7% | 0.0% | 0.7% | 0.0% | 4.3% | 0.0% | 12.8% | 9.9% | 6.4% | 4.3% | 5.7% | 26.2% | 10.6% | 88.7% | | |
| 講義A+ 講義B | 開始 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 6 | 10 | |
| | 展開 | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 2.1% | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 0.7% | 4.3% | 7.1% | |
| | | 11 | 1 | 0 | 1 | 0 | 9 | 0 | 18 | 14 | 10 | 8 | 8 | 39 | 22 | 141 | |
| | 終了 | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 6.4% | 0.0% | 12.8% | 9.9% | 7.1% | 5.7% | 5.7% | 27.7% | 15.6% | 100.0% | |
| | | 7.8% | 0.7% | 0.0% | 0.7% | 0.0% | 6.4% | 0.0% | 12.8% | 9.9% | 7.1% | 5.7% | 5.7% | 27.7% | 15.6% | 100.0% | |
| 合計 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 1 | 2 | 0 | 2 | 2 | 1 | 2 | 4 | 17 | | |
| 講義A+ 講義B | 開始 | 0.4% | 0.0% | 0.0% | 0.4% | 0.0% | 0.4% | 0.4% | 0.7% | 0.0% | 0.7% | 0.4% | 0.7% | 1.4% | 6.1% | | |
| | 展開 | 22 | 11 | 5 | 8 | 17 | 10 | 2 | 22 | 21 | 17 | 8 | 20 | 37 | 233 | | |
| | | 7.9% | 3.9% | 1.8% | 2.9% | 6.1% | 3.6% | 0.7% | 7.9% | 7.5% | 6.1% | 2.9% | 7.1% | 13.2% | 11.8% | | |
| | 終了 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 5 | 0 | 0 | 2 | 1 | 0 | 3 | 1 | 15 | | |
| | | 1.1% | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 1.8% | 0.0% | 0.0% | 0.7% | 0.4% | 0.0% | 1.1% | 0.4% | 5.4% | | |
| 計 | 26 | 11 | 5 | 9 | 17 | 16 | 3 | 24 | 23 | 20 | 10 | 24 | 40 | 280 | | | |
| 合計 | 9.3% | 3.9% | 1.8% | 3.2% | 6.1% | 5.7% | 1.1% | 8.6% | 8.2% | 7.1% | 3.6% | 8.6% | 14.3% | 18.6% | 100.0% | | |

注) 数値欄下段は、各講義におけるメタ言語表現数(講義A:139、講義B:141)に対する各出現位置のメタ言語表現の機能別出現数を表している。

5.2. 「大話段」(「開始部」「展開部」「終了部」)を展開させるメタ言語表現の談話モデル

【図 1】は、【表 1】に基づき、【講義 A・B】で出現率の高かったメタ言語表現を大話段(「開始部」「展開部」「終了部」)ごとに示した談話モデルである。講義内容や講義の進め方が異なっても、開始部と終了部に「8. 行動提示」が出現するなど、講義の談話に共通の特徴が見られる。
<開始部> 講義者は、開始部で挨拶をして、「8. 行動提示」で授業開始を宣言する。

(例 15) B1: 多重という項目に入ります。「8. 行動提示」

<展開部> 講義内容や講義の進め方によってメタ言語表現の機能が異なるが、「1. 話題提示」や「8. 行動提示」で以後に話す話題を示すことが多い。

(例 16) A241: (なんで「ていうか」というのが不愉快に感じられるんだろうか) ということを考えていきたいと思います。「1. 話題提示」

(例 17) B38: それを紹介しませけれども、～「8. 行動提示」

また、「1. 話題提示」や「8. 行動提示」で示された大きな話題に関わるサブポイントとして、「2a. 理由提示」、「2b. 重点提示」、「2c. 疑問提示」、「2d. 例示」で小さな話題を示す場合がある。

(例 18) A331: それはなんでだろうか というと、～「2a. 理由提示」

(例 19) A48: ここで押さえてほしいの は、～「2b. 重点提示」

(例 20) A108: どういう役割を している か というと、～「2c. 疑問提示」

(例 21) A185: 先程見た 3 番の例の よ う に、～「2d. 例示」

特に重要な専門用語や概念は、「4a. 用語の定義」や「4b. 用語の言い換え」で詳述する。また、専門用語や概念の理解を促進させるため、「7. 受講者の理解確認」を用いる。

(例 22) B221: それを暗示引用 という ふ う に い っ て ま す。「4a. 用語の定義」

(例 23) B431: そういうのを、ま ー、言 い 換 え れ ば、パ ロ デ ィ だ と い う ふ う に 考 え て く れ ば い い と 思 い ま す。「4b. 用語の言い換え」

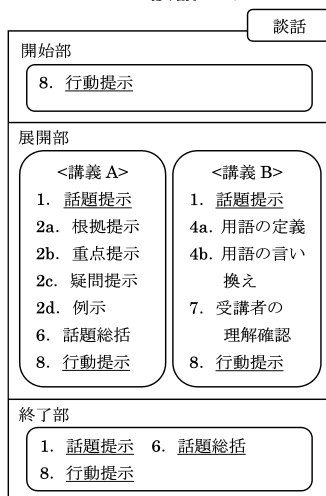
(例 24) B73: この中 で ー、多 重 入 っ て ん な っ て、ピ ン と き た 人 い ま せ ん か。「7. 受講者の理解確認」

受講者の理解のために、講義者が「3a. 自己発話焦点化」や「3b. 他者発話焦点化」で自分や他者が述べた事柄に言及し、「5a. 表現の補正」、「5b. 表現の検索」でより適切な表現を工夫する場合もある。

(例 25) A177: 先程 言 い ま し た よ う に、～「3a. 自己発話焦点化」

(例 26) A42: 上野 さん と 酒 巻 さん の 言 葉 が 端 的 に 示 し て い る よ う に、

**【図 1】メタ言語表現
の談話モデル**



注 1) 開始部、展開部、終了部は大段落である。

注 2) 「3. 自己発話焦点化」と「5. 表現の調整」は、開始部、展開部、終了部のいずれにも出現する。

注 3) 講義 A と講義 B 共通に出現率の高い機能には下線を付した。

～「3b. 他者発話焦点化」

(例 27) A126: 厳密にいうと、～「5a. 表現の補正」

(例 28) B142: 正しくは、何だっけな。「5b. 表現の検索」

「展開部」や「展開部」を形成する話段が終了する場合は、「6. 話題総括」で話題をまとめる。

(例 29) B303: わかる人にだけわかればいいやというようなもの、と
いうものをいくつか、段階を分けて説明しました。「6. 話題総括」

<終了部> 「1. 話題提示」で次の講義の話題を示し、「6. 話題総括」で講義全体の内容をまとめ、「8. 行動提示」で授業終了を告げる。

(例 30) A401: 残る話というのは、～「1. 話題提示」

(例 31) A394: それが、まあ、あの、今日の話のメイン・テーマでした。「6. 話題総括」

(例 32) A405: この講義を終えたいと思っています。「8. 行動提示」

5.3. 「話段」を展開させるメタ言語表現 【表 2】話段と中心文におけるメタ言語表現の出現傾向

【表 2】は、分類対象としたメタ言語表現の話段開始発話と話段終了発話、中心文における出現数と出現率を示す。話段開始発話と話段終了発話に出現するメタ言語表現は談話を構造化し、中心文に出現するメタ言語表現は、重要な内容を明示する働きを持つと考えられる。

【講義 A】におけるメタ言語表現の出現率は、話段開始発話が 94.6%、話段終了発話が 73.0%、中心文が 81.1%と、50%以上を示している。

【講義 B】においても、それぞれ 53.1%、37.5%、39.1%となり、

【講義 A】ほどではないものの、メタ言語表現が話段の開始や終了、中心文を明示する働きを持っている。

【講義 A】と【講義 B】の合計値が話段開始発話、終了発話、中心文においていずれも 50%を超えていることから、メタ言語表現の機能を理解することによって、講義の談話展開や重要な内容に関する理解が深まることが予想される。

| 資料 | ① 出現 位置 メタ 言語 表現 の | ② 各講 と義 中心 文の おける 数 | ③ | ④ |
|-----|--------------------------------------|---------------------------------------|--|--------------------------------|
| | | | ②の うち 中心 文の メタ 言語 の 数 | メタ 言語 表現 の 出現 率 |
| 講義A | 話段開始 | 37 | 35 | 94.6% |
| | 話段終了 | | 27 | 73.0% |
| | 中心文 | | 30 | 81.1% |
| 講義B | 話段開始 | 64 | 34 | 53.1% |
| | 話段終了 | | 24 | 37.5% |
| | 中心文 | | 25 | 39.1% |
| 合計 | 話段開始 | 101 | 69 | 68.3% |
| | 話段終了 | | 51 | 50.5% |
| | 中心文 | | 55 | 54.5% |

- 注1)「メタ言語表現の出現率」は、③/②で算出した。
 注2)「話段」は、多重構造における最小の話段を対象としている。
 注3)「話段開始」は話段開始発話、「話段終了」は話段終了発話におけるメタ言語表現数を表している。
 注4)「中心文」と「話段開始」または「話段終了」が重複した場合は、両方の欄に記載している。
 注5)「話段開始」とは話段開始の1発話目、「話段終了」とは話段最後の発話を表している。

【表 3】は、話段開始発話、話段終了発話、中心文におけるメタ言語表現の機能別出現数と出現率を示す。一つの中心文に複数含まれている場合は、全てのメタ言語表現を分析対象としている。

【表 3】講義の談話の「話段」におけるメタ言語表現の出現傾向

| メタ言語表現 資料 | 出現位置 | メタ出現位置別表現の出現数 | 1 話題提示 | | | | 2サブポイント提示 | | | | 3 自己発話焦点化 | | 4用語の規定 | | 5表現の調整 | | 6 話題総括 | 7 受講者の理解確認 | 8 行動提示 |
|--------------|--------|---------------|----------|----------|----------|--------|-------------|-------------|-----------|-------------|-----------|-----------|--------|-------|--------|-------|--------|------------|--------|
| | | | 2 a 根拠提示 | 2 b 重点提示 | 2 c 疑問提示 | 2 d 例示 | 3 a 自己発話焦点化 | 3 b 他者発話焦点化 | 4 a 用語の定義 | 4 b 用語の言い換え | 5 a 表現の補正 | 5 b 表現の検索 | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 出現数 | 出現率 | 出現数 | 出現率 | | | |
| 講義A | 話段開始 | 33 | 5 | 3 | 1 | 2 | 3 | 4 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 2 | 1 | 11 | | | |
| | | 100.0% | 15.2% | 9.1% | 3.0% | 6.1% | 9.1% | 12.1% | 0.0% | 0.0% | 3.0% | 0.0% | 0.0% | 6.1% | 3.0% | 33.3% | | | |
| | 話段終了 | 23 | 0 | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 2 | 0 | 12 | 0 | 4 | | | |
| | 100.0% | 0.0% | 0.0% | 4.3% | 4.3% | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 13.0% | 0.0% | 8.7% | 0.0% | 52.2% | 0.0% | 17.4% | | | | |
| | 中心文 | 44 | 3 | 5 | 1 | 4 | 1 | 4 | 0 | 3 | 4 | 1 | 0 | 9 | 0 | 9 | | | |
| | | 100.0% | 6.8% | 11.4% | 2.3% | 9.1% | 2.3% | 9.1% | 0.0% | 6.8% | 9.1% | 2.3% | 0.0% | 20.5% | 0.0% | 20.5% | | | |
| 講義B | 話段開始 | 48 | 9 | 0 | 0 | 1 | 0 | 4 | 0 | 1 | 1 | 4 | 5 | 3 | 7 | 13 | | | |
| | | 100.0% | 18.8% | 0.0% | 0.0% | 2.1% | 0.0% | 8.3% | 0.0% | 2.1% | 2.1% | 8.3% | 10.4% | 6.3% | 14.6% | 27.1% | | | |
| | 話段終了 | 25 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 3 | 1 | 2 | 6 | 3 | 7 | | | |
| | 100.0% | 0.0% | 4.0% | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 4.0% | 0.0% | 4.0% | 12.0% | 4.0% | 8.0% | 24.0% | 12.0% | 28.0% | | | | |
| | 中心文 | 27 | 1 | 1 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 6 | 4 | 2 | 0 | 6 | 3 | 2 | | | |
| | | 100.0% | 3.7% | 3.7% | 0.0% | 3.7% | 0.0% | 3.7% | 0.0% | 22.2% | 14.8% | 7.4% | 0.0% | 22.2% | 11.1% | 7.4% | | | |
| 合計 | 話段開始 | 81 | 14 | 3 | 1 | 3 | 3 | 8 | 0 | 1 | 2 | 4 | 5 | 5 | 8 | 24 | | | |
| | | 100.0% | 17.3% | 3.7% | 1.2% | 3.7% | 3.7% | 9.9% | 0.0% | 1.2% | 2.5% | 4.9% | 6.2% | 6.2% | 9.9% | 29.6% | | | |
| | 話段終了 | 48 | 0 | 1 | 1 | 1 | 0 | 1 | 0 | 4 | 3 | 3 | 2 | 18 | 3 | 11 | | | |
| | 100.0% | 0.0% | 2.1% | 2.1% | 2.1% | 0.0% | 2.1% | 0.0% | 8.3% | 6.3% | 6.3% | 4.2% | 37.5% | 6.3% | 22.9% | | | | |
| | 中心文 | 71 | 4 | 6 | 1 | 5 | 1 | 5 | 0 | 9 | 8 | 3 | 0 | 15 | 3 | 11 | | | |
| | | 100.0% | 5.6% | 8.5% | 1.4% | 7.0% | 1.4% | 7.0% | 0.0% | 12.7% | 11.3% | 4.2% | 0.0% | 21.1% | 4.2% | 15.5% | | | |

注1) 数値欄下段の割合は、「位置別メタ言語表現出現数」に対する「機能別メタ言語表現出現数」の割合を示している。

注2) 「中心文」と「話段開始」または「話段終了」が重複した場合は、両方の欄に記載している。

注3) 「話段開始」とは話段開始の1発話目、「話段終了」とは話段最後の発話を表している。

【講義 A】について、話段開始発話では「8. 行動提示」(33.3%)、「1. 話題提示」(15.2%)、「3a. 自己発話焦点化」(12.1%)、話段終了発話では「6. 話題総括」(52.2%)、「8. 行動提示」(17.4%)、中心文では「6. 話題総括」(20.5%)、「8. 行動提示」(20.5%)、「2a. 根拠提示」(11.4%)の出現率が高くなっている。

一方、【講義 B】について、話段開始発話では「8. 行動提示」(27.1%)、「1. 話題提示」(18.8%)、話段終了発話では「8. 行動提示」(28.0%)、「6. 話題総括」(24.0%)、「4b. 用語の言い換え」(12.0%)、「7. 受講者の理解確認」(12.0%)、中心文では「4a. 用語の定義」(22.2%)、「6. 話題総括」(22.2%)、「4b. 用語の言い換え」(14.8%)の出現率が高い。また、専門用語の説明を目的とする【講義 B】では、【講義 A】より、中心文に

おける「4a. 用語の定義」と「4b. 用語の言い換え」の出現率が高い。

以上の分析結果から、講義は、「1. 話題提示」や「8. 行動提示」で開始し、「6. 話題総括」や「8. 行動提示」で終了する傾向がある。また、中心文では、「1. 話題提示」、「6. 話題総括」、「8. 行動提示」が重要になること、さらに、専門用語の説明を目的とした講義では、「4a. 用語の定義」や「4b. 用語の言い換え」といった「4. 用語の規定」に関するメタ言語表現にも注意しなければならないことが推察される。

つまり、講義の談話では、「1. 話題提示」、「6. 話題総括」、「8. 行動提示」、「4a. 用語の定義」、「4b. 用語の言い換え」の5種のメタ言語表現が談話展開と情報内容の重要度を明示する鍵になる。受講者が講義を正しく理解するには、特にこれら5種のメタ言語表現の機能と表現形式に習熟する必要がある。また、講義者の観点から言えば、メタ言語表現を効果的に活用することによって、受講者に講義内容をわかりやすく伝達できる可能性があるといえる。

5.4. 「話段」を展開させるメタ言語表現の話段モデル

【図2】は、【表3】に基づくメタ言語表現の話段モデルである。

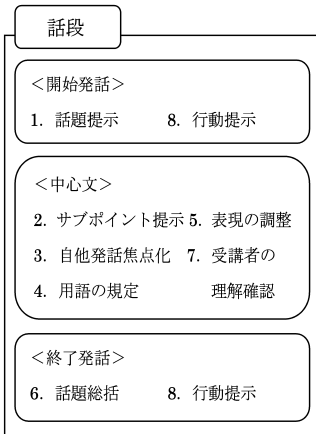
【講義 A・B】の共通の特徴として、話段は、「1. 話題提示」や「8. 行動提示」で開始し、「6. 話題総括」や「8. 行動提示」で終了する。話段の開始発話と終了発話に出現したメタ言語表現と、談話の開始部と終了部におけるメタ言語表現の機能が共通することから、メタ言語表現は、話段を形成しつつ、談話全体を展開させ、構造化しているといえる。

中心文のメタ言語表現は、【講義 B】では、「4a. 用語の定義」、「4b. 用語の言い換え」の出現率が高く、【講義 B】の展開部の傾向とも一致する。これは、談話と話段の相似関係を示すとともに、展開部における中心文の特徴が講義を特徴づけることを示している。

メタ言語表現は、「1. 話題提示」や「8. 行動提示」によって、談話や話段の開始や終了を明示する機能を有する。さらに、中心文に出現するメタ言語表現は、講義の重要な内容を示しつつ、談話全体の特徴を示す一つの手がかりになる。

なお、【図2】の具体例として、話段におけるメタ言語表現の使用例を次に示す。〈例〉は、メタ言語表現が使用された発話のみ挙げる。開始発話に「1. 話題提示」、終了発話に「6. 話題総括」、継続発話に「2. サブポイント提示」、「3. 自他発話焦点化」、「4. 用語の規定」、「5. 表現の調整」が使用されている。

【図 2】メタ言語表現の
話段モデル



注 1) 中心文では、「6. 話題総括」「8. 行動提示」「4a. 用語の定義」「4b. 用語の言い換え」の出現傾向が高い。

注 2) 中心文と開始発話、または終了発話が重複する場合がある。

<例>

A199 : (8)で、えっと、さて、今度は、話し言葉における言い換えというのを考えてみたいと思います。

【開始発話／中心文】「1. 話題提示」

A200 : で、話し言葉における言い換えというのは、まあ、典型的には、さっき言った、「っていうか」、もう少し、その、フォーマルな形でいえ、「というか」というものがよく使われます。「3a. 自己発話焦点化」「5a. 表現の補正」

A202 : で、言い換えにも二通りあると思うんですね。「2b. 重点提示」

A207 : その時に、まあ、上書きというか、上に重なるようにして、言い換える、というのが、話し言葉の言い換えの特徴。「4b. 用語の言い換え」

A208 : つまり、まあ、話し言葉における言い換えというのは、言い直しである。「4a. 用語の定義」

A209 : 即興的な言い換えである、というふうに言えます。

【終了発話／中心文】「6. 話題総括」

6. まとめ

本研究の結果は、以下の 3 点である。

- (1) 【講義 A・B】に使用されたメタ言語表現は、全 8 類 14 種の機能に分類される。メタ言語表現は、談話を展開させて構造化し、聞き手の理解を促したり、内容情報の重要度を明示する。
- (2) 講義の「開始部」「終了部」では、メタ言語表現に講義の談話共通の出現傾向が見られる。一方、「展開部」では、講義の内容や進め方によって、異なった機能を有するメタ言語表現が出現している。
- (3) メタ言語表現は、受講者が講義を理解するための談話指標であるといえる。さらに、講義者の観点から言えば、受講者に講義内容をわかりやすく伝達するための談話指標として捉えることができる。

講義を理解することは、留学生にとって最も必要とされる能力でありながら、獲得することが難しい能力でもある。しかし、メタ言語表現は、講義理解を促進させる談話指標の一つとなり得る。講義の談話における

メタ言語表現の機能に習熟し、談話の展開や重要な内容を把握できれば、受講者は、長時間にわたる講義の談話を正確に理解し、学習や研究に必要な情報を得ることができる。その意味で、講義者にも、メタ言語表現をわかりやすい講義を行うための談話指標として捉えることが期待される。

【注】

- (1) 西條が分類した7種とは、「①話題の提示」「②-1 他者発話焦点化」「②-2 自己発話焦点化」「③-1 主張型総括」「③-2 評価型総括」「③-3 前触れ型総括」「④サブポイント提示」「⑤補正」「⑥表現の検索」「⑦宣言」である。
- (2) 本研究は、中井・寅丸（2007）に基づくが、「統括」という観点を重視し、メタ言語表現を話段と中心文を理解する談話指標の一つとして機能分類し直した点が異なっている。機能分類の相違点は（注3）参照のこと。
- (3) 本研究の機能分類は、「2. 先行研究」に示した西條（1999）と中井・寅丸（2006）による機能分類を参考にした。西條による分類のうち、「①話題の提示」を本研究では「1. 話題提示」とし、「②-1 他者発話焦点化」「②-2 自己発話焦点化」を「3a. 自己発話焦点化」「3b. 他者発話焦点化」、「③-1 主張型総括」「③-2 評価型総括」「③-3 前触れ型総括」を「6. 話題総括」としてまとめた。「⑤補正」「⑥表現の検索」は、「5. 表現の調整」としてまとめ、「5a. 表現の補正」「5b. 表現の検索」という下位分類を設けた。「④サブポイント提示」は、「2. サブポイント提示」として、「2a. 根拠提示」「2b. 疑問提示」「2c. 重点提示」「2d. 例示」という下位分類を設けた。また、中井・寅丸（2007）による分類のうち、「①1 用語の言い換え説明」を「4b. 用語の言い換え」、「③受講者の理解・知識に関する言及」を「7. 受講者の理解確認」とした。本研究では、先行研究を踏まえたこれらの機能に加え、あらたに「4. 用語の規定」の下位分類となる「4a. 用語の定義」、及び「8. 行動提示」の2機能を設けた。
- (4) 「8. 行動提示」は「1. 話題提示」の機能を有する場合がある。しかし、講義では、受講者が講義者に要求されている行動を聞き分ける必要があることを考慮し、行動指示を目的としたメタ言語表現を「8. 行動提示」として分類した。

【参考文献】

- 西條美紀（1999）『談話におけるメタ言語の役割』風間書房
- 西條美紀（2007）『学際的アプローチによる大学生の講義理解能力育成のためのカリキュラム開発』平成16年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書

- 佐久間まゆみ (1987) 『『文段』認定の一基準 (I) — 提題表現の統括 —』『文藝言語研究・言語篇』11 筑波大学文芸・言語学系 pp. 89-135
- 佐久間まゆみ (2003) 「第 5 章 文章・談話における『段』の統括機能」北原保雄監修、佐久間まゆみ編『朝倉日本語講座 7 文章・談話』朝倉書店 pp. 91-119
- 佐久間まゆみ (2006) 「文章・談話の分析単位」『言語』35-10 大修館書店 pp. 65-73
- 佐久間まゆみ (2007) 「第 1 章 講義の談話の話段と談話型」『学際的アプローチによる大学生の講義理解能力育成のためのカリキュラム開発』平成 16 年度～平成 18 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C)) 研究成果報告書 研究代表者 西條美紀 pp. 1-22
- 杉戸清樹 (1989) 「言語行動についてのきまりことば」『日本語』8-2 明治書院 pp. 4-14
- 杉戸清樹・塚田実知代 (1991) 「言語行動を説明する表現—専門的文章の場合—」『研究報告集』12 国立国語研究所 秀英出版 pp. 131-164
- 中井陽子・寅丸真澄 (2007) 「第 7 章 講義の談話のメタ言語表現」『学際的アプローチによる大学生の講義理解能力育成のためのカリキュラム開発』平成 16 年度～平成 18 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C)) 研究成果報告書 研究代表者 西條美紀 pp. 74-83

< 謝辞 >

本研究において、談話資料の使用のご承諾と貴重なご指導を賜りました早稲田大学の佐久間まゆみ教授と東京工業大学の西條美紀教授、また、意義深いご示唆をいただきました国際教養大学の中井陽子氏に深く御礼申し上げます。

—とらまる ますみ 早稲田大学大学院日本語教育研究科博士後期課程—